KINGCA　Week 2025　in Seoul に参加して

大阪市立総合医療センター　消化器外科　久保尚士

この度、韓国ソウルで開催された Korean International Gastric Cancer Association (KINGCA) Week 2025 に参加しましたので、報告させていただきます。本学会は、2025 年 9 月 25 日から 27 日までソウルにあるロッテホテルソウルで開催されました。私は、2022 年から本学会に毎年参加しており、今回で 4 回目になります。本学会は、韓国の胃癌に関する最も大きな学会で、消化器内科医、外科医、腫瘍内科医が参加しており、すべてのセッションが英語で構成されています。よって、参加者も韓国だけなく、中国、日本を含むアジア、欧米からも多数の医師が参加しており、発表者が、英語で発表後に、質疑応答も英語で、活発にされておりました。口演会場も 3 か所に限定されており、非常に聴講しやすく感じました。私は外科医ですので、外科のセッションを中心に聴講しました。手術に関しては、噴門側胃切除後の再建法や reduced port surgery 、ERAS など、日本でも話題になっている内容が取り上げてられていました。日本からは、噴門側胃切除後の残胃癌に関してがん研究会有明病院の布部先生、ロボットを使用した大動脈周囲リンパ節郭清を伴うサルベージ手術に関して藤田医科大学の宇山先生が講演されており、非常に勉強になりました。私は、低侵襲胃癌手術における CT 画像を活用した術後合併症発生予測マーカーの内容をポスター発表させて頂きました。韓国の施設からの発表は、症例数が多く短期間で行われた研究が多く

説得力があり、非常に勉強になりました。本邦の胃癌学会でもアジアや各国からの参加者を増やすために、もう少し英語のセッションを増やすべきだと感じられました。また、KINGCA には、学会の前後に、マスタークラスと称した韓国のハイボリュームセンターでの手術見学制度があります。私の後輩である大阪公立大学の石舘武三先生には、このマスタークラスを利用して、延世大学で手術見学をしてもらいました。見学期間は、3 日間で、インドネシア、モンゴル、中国出身の医師とともに、1 日 5－6 件の手術を見学して頂きました。私も、延世大学で彼らとともに手術見学をさせて頂きました。驚いたのは、若いスタッフの先生数名が、教授と同じ質とスピードで手術を行っていたことです。延世大学では、日本のように指導医が若い先生に執刀させて教育するのではなく、若い先生は、ひたすら手術助手をして手術を学び、自分がスタッフになった瞬間から独立して手術を行うスタイルです。レジデントの時に、参加して学んでいる手術件数が多いこと、スタッフになった後に行う手術件数が多いことから、自分が執刀する段階になってから急速に手術の技術が進んでいくのではないかと感じられました。日本では、患者集約化が韓国ほど進んでおらず、1 人の医師が行う手術件数が韓国ほど多くないので、難しい部分はありますが、若い時から、日本の様々な施設で多数の手術を見学して学ぶことは、若手の育成には、重要ではないかと感じられました。学会参加、マスタークラスともに非常に有意義な機会でした。最後に、このようなすばらしい機会を与えて頂いた日本胃癌学会の関係者の皆様に厚く御礼を

申しあげます。本当にありがとうございました。

KINGCA Week 2025 学会会場にて

左から私、がん研有明病院の布部先生、当院の櫻井先生

マスタークラスに参加した大阪公立大学の石館先生（左）と証書を授与して頂いた

延世大学の Kim 教授（右）

延世大学セブランス病院手術室にて

Hyoung Il Kim 教授とマスタークラス参加者